秋田魁新報　2022年06月28日付　県南

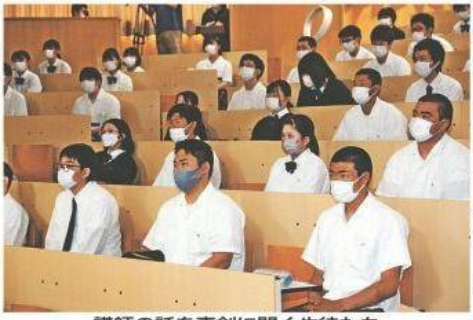
脱プラへ理解深めて

大曲農高　県立大准教授が授業

講師を務めた境准教授

大仙市の大曲農業高校で脱プラスチックに関する特別授業が行われた。生徒たちは農業現場でもよく使われるプラスチックが生態系に及ぼすリスクや付き合い方を学び、ごみ排出量を減らす心がけの必要性を実感した様子だった。

県立大の境英一准教授（複合材料工学）が、プラスチックごみの問題について「回収されたうち78％が埋め立てられたり、海洋などへ投棄されたりしている。プラスチックは自然界でほとんど劣化しないため、自然界に流出するとそのまま残存する」と説明。ウミガメが漁網に絡まったり、プラスチックを誤って食べた鳥が胃袋に詰まらせて餓死したりといった事例を挙げ「影響は枚挙にいとまがない」と指摘した。



講師の話を真剣に聞く生徒たち

微細なマイクロプラスチックの問題についても解説。プラスチックは海に流出して破砕され細かくなると、海洋生物が誤って食べて排出する過程でより細かくなり、さらに小さい生物が食べるという経緯で生態系に取り込まれ、食事を通して人間の体内にも入る恐れがあるとした。

一方で金属の代わりに使えば軽く、断熱材や品質保持の容器としても使え、エネルギー消費量を低減するプラス面もあるとして「付き合い方が大事」と強調。日本のプラスチックごみ排出量は850万トンだとし「仮に1％が流出しただけでも8万トン以上に上る。現状は排出量が多すぎるので、使う量を減らさなければならない」と呼びかけた。

授業を聞いた冨岡優也さん（3年）は「生態系にまで影響を与えていると知り驚いた。農業の在り方も自然に配慮した形になっていってほしい」と話した。

授業は16日に行われ、3年生と2年生の計約100人が受けた。（石塚健悟）

©秋田魁新報社